

4.

特別招聘教授 プロジェクト

2017 年度特別招聘教授 プロジェクト概要

- 1) ラウラ・ネンツィ 特別招聘教授
- 2) アネッテ・シャート＝ザイフェルト
特別招聘教授

▶ 2017 年度 特別招聘教授プロジェクト概要

国際的な研究の最先端の知見を研究教育に提供

「特別招聘教授プロジェクト」はジェンダー研究所の重要な事業のひとつであり、その主な目的は、グローバルな視野から本学のジェンダーに関する教育研究活動の一層の推進及び活性化を図ることである。具体的には、海外の著名な研究者を招聘し、高水準の研究プロジェクトの実施、国際シンポジウムの企画・登壇を含む国際的な研究ネットワークの構築、大学院生を対象としたセミナー等での講義による国際レベルのジェンダー研究教育プログラムの実施に貢献していただいた。2017 年度は、ラウラ・ネンツィ氏（テネシー大学）、アネッテ・シャート＝ザイフェルト氏（ハインリッヒ・ハイネ大学デュッセルドルフ）の 2 名を招聘した。

ネンツィ氏の専門領域は近世日本史で、これまで江戸時代末期の女性たちに焦点を当て、多くの優れた研究実績を挙げている。特に、近刊の *The Chaos and Cosmos of Kurosawa Tokiko*（ハワイ大学出版）は、歴史学のみならず、ジェンダー研究者からも、日本の女性史についての理解を深めることにつながったとの高い評価を得ている。

前年度に引き続き、本学における採用期間中（2016 年 10 月 3 日～2017 年 7 月 31 日）には、日本の近世、徳川社会に焦点を当てた新規のプロジェクト「After Dark: The Nighttime in Nineteenth Century Japan（日暮れ後：19 世紀日本の夜）」に取り組んだ。ネンツィ氏には、2017 年 6 月 2 日（金）開催の、国際シンポジウム「デモクラシーのポスターガール：冷戦期日本のミスコン女王とファッションモデル（Democracy's Poster Girls: Beauty Queens and Fashion Models in Cold War Japan）」を企画していただいた。また、2017 年 7 月 18 日（火）に本学の教員と大学院生を対象とした IGS セミナー「The Size of History: Small Worlds, Big Worlds, and the People Caught in Between（歴史のサイズ：小さな世界、大きな世界、その間の人々）」と題する講義をしていただいた。さらに、2017（平成 29）年度前期の、博士前期課程「リーダーシップ国際演習」を担当していただき、「Tokugawa Culture and Society as Seen Through Travel（旅から見た近世文化と社会）」をテーマとした英語による講義を行っていただいた。

シャート＝ザイフェルト氏の専門は日本学研究で、日本の人口動態、家族政策とジェンダー課題についての研究を展開し、国際共同研究も含む、多くのすぐれた研究実績を挙げている。特に、近年の「ウーマノミクス」に関する論文は、日本学研究者のみならず、ジェンダー研究者や社会学者からも、日本の女性の活躍と政策との関連についての理解を深めることにつながったという高い評価を得ている。本学採用期間中の 2018 年 2 月 1 日～2018 年 3 月 31 日には、①Japan's single society and the increase in the proportion of never-married persons（日本の独身社会と未・非婚の増加）②Womenomics and the development of the female labor market under Japan's gender equality policies（ウーマノミクスと日本の男女平等政策下での女性労働市場の発展）の 2 つの研究プロジェクトに取り組み、フィールドワークと文献調査を進めた。また、これらの研究成果に基づく国際シンポジウム「日本における独身、ひとり暮らし、ワーク・ライフ・コン

フリクト (Singlehood, Living Alone and Work-Life Conflict in Japan)」(2018 年 2 月 21 日 (水)) 開催の企画および、大学院生と教員を対象とした英語による IGS セミナー「Are Market Conditions Better in Achieving Gender Equality than Politics? Abe's 'Womenomics' and Beyond (経済効果は政策よりもジェンダー平等達成に有効か? 安倍政権の『ウーマノミクス』以降)」(2018 年 2 月 9 日 (金)) の講義をしていただいた。

両氏とも、シンポジウムやセミナーでは、進行中のプロジェクトからの成果を発表してくれるなど、最先端の知見を本学の教育現場で披露してくれた。また、両氏に企画していただいた国際シンポジウムおよび IGS セミナーでは、参加者との間で活発な意見が交換された。世界的に著名な研究者との直接的な意見交換により学びを深化させる機会を本学の研究者に提供できたことは、特に将来を担う若手研究者にとって、今後の研究指針を手にする貴重な機会となったであろうと評する。本特別招聘教授プロジェクトを通じて、当初の期待以上の成果がもたらされ、本学におけるジェンダー研究に、グローバルかつ学際的な最先端の知見を提供し、同時に、教育研究活動の活性化をもたらすことができた。

1) ラウラ・ネンツィ特別招聘教授プロジェクト実施概要

【ラウラ・ネンツィ特別招聘教授プロフィール】



テネシー大学教授（日本史）。カリフォルニア大学サンタバーバラ校博士（歴史）。研究分野は徳川時代の社会文化史で、特にジェンダーに関心を持っている。近世日本の旅文化、巡礼、幕末の社会、明治維新で女性が果たした役割などのテーマに関する論文を、多数発表している。代表的著書は『The Chaos and Cosmos of Kurosawa Tokiko: One Woman's Transit from Tokugawa to Meiji Japan』（ハワイ大学出版、2015 年）、『Excursions in Identity: Travel and the Intersection of Place, Gender, and Status in Edo Japan』（ハワイ大学出版、2008 年）。これまで、東京大学、京都大学、国立歴史民俗博物館などで研究を行ない、ヨーロッパにおいても英国、スコットランド、イタリアなどで国際的な研究活動を展開している。米国内では、ハーバード大学、プリンストン大学、ペンシルベニア大学などのトップ大学において招待講演をしている。研究視点は歴史、女性学、ジェンダー研究などを取り入れた独創的なものである。

【前年度成果および期待されるプロジェクト成果】

米国・テネシー大学のラウラ・ネンツィ博士は、2016 年 10 月に赴任しており、前年度にも、国際シンポジウム「明治期のジェンダー、宗教、社会改良：炭谷小梅と中川横太郎」の企画開催、英語による IGS セミナー「江戸時代の武家の女性たち」および「ジェンダー・食・帝国：『他者を食べる』物語と記憶（林芙美子の小説と成瀬巳喜男の翻案映画を中心に）」、「徳川時代のジェンダー課題」をテーマとした博士前期課程比較社会文化学専攻歴史文化学コース「歴史資料論特論」を開講するなどの実績を挙げている。2017 年度も引き続き、本学においてジェンダー研究、教育、国際ネットワーク構築への貢献が期待できる。

【採用期間】 2016 年 10 月 3 日～2017 年 7 月 31 日

【職務内容およびその支援】

ネンツィ特別招聘教授に依頼した業務は、以下の 5 項目である。

- 1) ジェンダー研究所における研究プロジェクトの推進
- 2) 大学院セミナーでの講義など教育事業への参加
- 3) 国際シンポジウムの企画およびプログラム内での報告
- 4) ジェンダー研究所を中心とした国際的研究ネットワーク構築支援
- 5) 上記活動についての成果報告

在職中の業務支援については、ジェンダー研究所スタッフが事務業務の支援を担当した。

【プロジェクト概要】

1) 研究プロジェクトの実施

日本の近世、徳川社会の研究として、新規のプロジェクト「After Dark: The Nighttime in Nineteenth Century Japan (日暮れ後：19 世紀日本の夜)」に取り組んでいる。テーマは、江戸期日本の夜の闇である。夜という時間帯が、文化的、政治的にどのような意味をもっていたか、昼の生活を形作る夜の時間の管理の在り方や、それらをジェンダー視点から分析する試みである。また、幕末に向けての社会変化の中で、夜の持つ意味が社会的にどのように変わってきたかにも着目する。新規プロジェクトであることから、文献収集を中心とした研究活動であった。

2) ジェンダー研究所主催国際シンポジウムの企画運営および総合司会登壇



2017 年 6 月 2 日（金）開催の、国際シンポジウム「デモクラシーのポスターガール：冷戦期日本のミスコン女王とファッションモデル」の企画を担当した。米ノースカロライナ大学チャペルヒル校のジャン・バーズレイ教授を基調講演者に迎え、コメンテーターとして青山学院大学の Mary A. Knighton 教授と本学の坂本佳鶴恵教授が登壇した。1950 年代以降盛んに開催されるようになったアメリカ式のミス・コンテストは、冷戦という国際情勢を背景に、アメリカが認める女性の美や自立が評価される場であり、結果として、それが日本のジェンダー規範を大きく揺さぶるものであったとの分析を中心に、熱の入った議論が展開された。



[参照:本報告書 54～56 頁]

3) IGS セミナーにおける研究報告

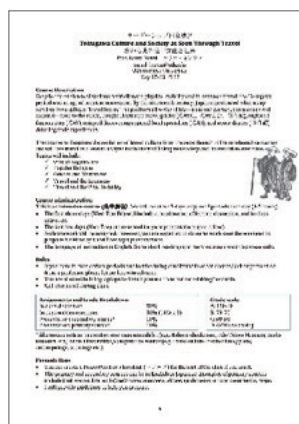


著書『The Chaos and Cosmos of Kurosawa Tokiko (黒澤止幾子の混沌と秩序)』を題材に、自身に取り組むマイクロヒストリーの方法論についての講義「歴史のサイズ：小さな世界、大きな世界、その間の人々」を行った。2017 年 7 月 18 日（火）開催。歴史研究には、その研究が扱う地域区分や時代区分、文化的区分も含め、様々なサイズがある。マイクロヒストリーは、一般的にはあまり知られていない地方都市や町村、市井の人々や出来事に焦点を当てるものであり、ジェンダー視点の研究手法としても有効である。大きな歴史の流れの中で、人々がどのように考え、行動したかを探ることで、その時代をより深く理解することが可能になる。前年度に企画したセミナーと国際シンポジウムでも、マイクロヒストリー研究発表が中心とされており、一連の事業の総括となる内容であった。

[参照:本報告書 74～75 頁]



4) 大学院講義



2017（平成 29）年度前期の、博士前期課程「リーダーシップ国際演習」（特別招聘教授講義のため新たに設定された科目）の集中講義を担当した。「旅から見た近世文化と社会」をテーマとし、著書『Excursions in Identity: Travel and the Intersection of Place, Gender, and Status in Edo Japan』を題材に、江戸時代の旅文化を、関連法、宗教、ジェンダー、経済、出版などに着眼し多面的に分析する講義と、演習を中心にした英語による講義。

【プロジェクト成果】

2017（平成 29）年度のラウラ・ネンツィ特別招聘教授プロジェクトは、同プロジェクトの学内におけるプレゼンスを高め、そして研究ネットワーク構築の進展をもたらすものであったと言える。

今年度より、ジェンダー研究所およびリーダーシップ研究所の特別招聘教授が担当する大学院講義は、「男女共同参画演習」と「リーダーシップ国際演習」の科目名で開講されることとなり、専攻の枠を超えて、特に英語での講義の受講を希望する院生が履修しやすい環境が整えられた。しかし、ネンツィ氏の歴史学の講義のように、科目名と講義テーマが一致しない場合があるため、早期にポスター等で科目名と講義内容を併記して周知することや、講義テーマを専門領域とする教員から指導院生に履修を勧めてもらふなどの方法を検討している。また、これは前年度実施のものであるが、ネンツィ氏は 2016 年 12 月に本学で開催された第 11 回国際日本学コンソーシアムに参加し、日本文化部会の研究報告へのコメントを述べるなど、ジェンダー研究所事業に限らない貢献をしている。

2017 年 6 月 2 日開催の国際シンポジウムにおいては、自身のネットワークを活用して国内外から、本学所属研究者を含む登壇者を配置したほか、日本国内で日本研究に取り組む外国人研究者への広報にも尽力し、本学をハブとする研究ネットワークの構築に寄与した。招聘研究者の専門領域を見ると、近現代史や日本女性表象研究に取り組むバーズレイ氏、文学と視覚芸術研究者である Knighton 氏、社会学者である坂本氏と学際的な顔ぶれとなっており、この場において醸成された研究者同士のつながりが、本研究が目的とする、学際的な研究ネットワークに発展することが期待される。また、これをきっかけに、ノースカロライナ大学チャペルヒル校のジャン・バーズレイ教授の 2018～19 年度の特別招聘教授就任が決定したことは、特記すべき成果と言える。教育面においても、大学院講義や IGS セミナーが、自身の研究の最新情報を披露する内容であったことは、受講する大学院生にとっても大変刺激となるものであった。

以上のとおり、そして前年度成果も合わせて、本特別招聘教授プロジェクトから、研究教育活動の活性化および研究ネットワーク構築という成果を挙げることが出来た。江戸の夜に関する研究プロジェクトは、新規の取り組みであったため、今回はその成果を発表するには至らなかったが、将来的に、研究の進捗または最終成果を本学で発表する機会を作ることが望まれる。

2) アネッテ・シャート＝ザイフェルト特別招聘教授プロジェクト実施概要

【アネッテ・シャート＝ザイフェルト特別招聘教授プロフィール】



ハインリッヒ・ハイネ大学デュッセルドルフ日本学教授。ベルリン自由大学で博士号を取得後、同大およびライプチヒ大学、ドイツ日本研究所（東京）で研究員。ドイツの現代日本社会学学会副会長を経験。主な研究分野は、日本社会、人口動態、家族政策とジェンダー課題。近著に「三浦展の『下流社会』にみるジェンダーと階級」（2010 年、『Contemporary Japan』）がある。また、日本の晩婚・非婚化、独身社会、草食男子とロスジェネ、父親と育メンプロジェクト、安倍政権の「ウーマノミクス」に関する論文をドイツ語で多数発表している。共編著に『人口上の課題：日本についてのハンドブック』（2008 年、フロリアン・クルマスほかとの共編）、『日本と EU の人口動態』（2010 年、島田信吾との共編）がある。『日本とドイツの家族政策』（Springer、ウタ・マイヤー＝グレーヴェと本澤巳代子との共編）が 2018 年刊行予定。

【業績および期待されるプロジェクト成果】

アネッテ・シャート＝ザイフェルト博士の専門領域は日本学研究で、これまで日本の文化、社会、政策、家族、女性に焦点を当てた研究を展開し、多くの優れた研究実績を挙げている。特に、近年のウーマノミクスに関する論文は、日本学研究者のみならず、ジェンダー研究者や社会学者からも、日本の女性の活躍と政策との関連についての理解を深めることにつながったという高い評価を得ている。シャート＝ザイフェルト氏は日欧米における研究ネットワークも確立しており、本学においてジェンダー研究所を拠点としたグローバルな共同研究ネットワークの構築に寄与することが可能である。また、シャート＝ザイフェルト氏の研究テーマは、独自の視点を持った大変興味深いものであり、本学の研究者・院生にとって、多くのことを学ぶ機会をもたらすことが期待できる。

【採用期間】 2018 年 2 月 1 日～2018 年 3 月 31 日

【職務内容およびその支援】

シャート＝ザイフェルト特別招聘教授に依頼した業務は、以下の 5 項目である。

- 1) ジェンダー研究所における研究プロジェクトの推進
- 2) 大学院生を対象としたセミナーでの講義など教育事業への参加
- 3) 国際シンポジウムの企画およびプログラム内での報告
- 4) ジェンダー研究所を中心とした国際的研究ネットワーク構築支援
- 5) 上記活動についての成果報告

在職中の業務支援については、ジェンダー研究所スタッフが事務業務の支援を担当したほか、博士後期課程院生がリサーチ・アシスタントを務めた。

【プロジェクト概要】

1) 研究プロジェクトの実施

以下の2つテーマの研究プロジェクトに取り組んだ。

- ①日本の独身社会と未・非婚の増加
- ②ウーマノミクスと日本の男女平等政策下での女性労働市場の発展

それぞれについてのフィールドワーク調査および共同研究者との研究会議、日本語文献収集を実施。また、①のテーマについては国内外から研究者を招聘して国際シンポジウムを開催、②については、その成果をIGSセミナーにて報告した。

2) ジェンダー研究所主催国際シンポジウムの企画運営および総合司会登壇



2018年2月21日（水）開催の、国際シンポジウム「日本における独身、ひとり暮らし、ワーク・ライフ・コンフリクト」の企画を担当した。日本のみならず世界各国で注目を集めている社会の独身化について、日本女性の世帯状況と就労の面を中心に議論した。プログラムは、西オーストラリア大学のローラ・デイルズ助教授およびシンガポール大学のスイリン・ホー助教授による研究報告と、大阪大学のスコット・ノース教授およびデュッセルドルフ大学のノラ・コットマン講師のコメントという構成であった。学内外から多くの参加者があり、登壇者と聴衆がプログラム終了後の懇親会の席でも熱心に語り合う集まりとなった。



[参照:本報告書 60～62 頁]

3) IGS セミナーにおける研究発表



日本において「女性活躍」政策として推進されているウーマノミクスについて、この経済効果重視型のアプローチが、持続的なジェンダー平等をもたらし得るかを検証する内容の講義「経済効果は政策よりもジェンダー平等達成に有効か？安倍政権の『ウーマノミクス』以降」を、2018年2月9日（金）に実施。1980年代以降女性の就労率は上がってきているが、既婚女性の労働参加は比較的低いままであり、育児支援や男性の育児参加奨励といった、ワーク・ライフ・バランスを目指した政策が導入されてきた。しかし、この効果が思わしくないことから、有償家事労働者として外国人労働者を受け入れるという、市場経済を活用したアメリカ型の対策へのシフトが、金融業界等からの示唆に基づき進められるようになってきている。この施策には、これからの日本がどのような社会を目指すのかというビジョンが見当たらないという指摘がなされた。[参照:本報告書 93～94 頁]



【プロジェクト成果】

2017（平成 29）年度のアネッテ・シャート＝ザイフェルト特別招聘教授プロジェクトは、ジェンダー研究所事業に、特に研究面での刺激となり、また、学術ネットワーク構築の進展をもたらすものであったと言える。研究プロジェクトおよび国際シンポジウム企画、IGS セミナー講義では、日本社会が現在直面する課題を取り上げており、ジェンダー研究が社会変革の重要な動力のひとつであるという姿勢を、シンポジウムやセミナーでの発言から伺うことが出来た。研究所所属の研究者たちも同様に、現代的な課題に取り組み、政策提言につながる研究を進めているが、こうした価値観を共有できる研究者が海外から事業に参加したことが、刺激とも励みともなった。

国際シンポジウムの企画は、「独身化社会とジェンダー」という新しい研究課題の、これからの方向性を模索する試みでもあった。関連テーマでの調査を進めている研究者の報告とコメントの内容は、独身の定義や世帯状況、結婚・出産と仕事の選択、雇用、管理職への昇進、ワーク・ライフ・バランス、家族関係、友人関係、ジェンダー平等、仕事や家庭を含む様々な場面での葛藤など、多岐に渡るものであったが、それが相互にかつ複雑に関係していることが議論からわかり、今後の研究がどのように進められるのか、どのようにテーマが絞り込まれていくのかに、興味がかきたてられた。また、特に本学の若手の研究者にとっては、このような、研究プロジェクトの初期段階の議論の場に参加したこと、国内および海外で同じ研究テーマに取り組む研究者たちに参加を呼び掛けて研究ネットワーク構築を図る機会に立ち会うことは、刺激的でありかつ学ぶところが多くあったであろう。

セミナーは、現在の日本の女性活躍政策「ウーマノミクス」をテーマとし、政策の背景にある思想や思惑、社会の期待や要請と政策の合致、そして政策の成果という、政策評価に関わる 3 つの要素の関係性に目を向ける内容であった。現在の新自由主義的政策は、持続的な女性活躍を目指すものではないという批判的な指摘はあったが、振り返って、男女雇用機会均等法や男女共同参画法が、制定時にその内容を疑問視する声がありながらも法制が敷かれたいきさつや、その後の改正や、運用にあたっての努力を経て現在の成果があるということを追って考察すると、何がジェンダー平等達成に有効なのかは、単純に測りきれない部分があると理解できる。セミナータイトルとなった設問は、このように深い考察を引き出す効果を持つものであり、参加した研究者にとって「リサーチ・クエスチョン」の重要性を再確認する機会にもなったと言える。

以上のとおり、本プロジェクトから、本学におけるジェンダー研究へのグローバルで学際的な最先端の知見提供、教育研究活動の活性化、研究ネットワーク構築という成果を挙げることが出来た。また、既に、研究所長である石井クンツ昌子教授をはじめとする本学研究者との書籍刊行プロジェクトも進行しており、今後の共同研究や国際的な研究ネットワークの発展も期待される。